共生委員会ニュース
# ともしび
2026 年度　第３号
2026 年１０月
共生探究学習委員会



## 共生委員会ニュース「ともしび」は

様々な経験をする機会を得た生徒や教員の声を皆さんへお届けします。高等部の3年間を通じ、同じ社会に共に暮らす様々な人々との関わりに目を向け、平和や共生の諸問題について考えていきましょう。他の人のさまざまな経験を共有し、深く考えるきっかけとして下さい。

スクールモットー「地の塩、世の光」

## ◎報告：ボランティア部( 文化祭 )

クラブ活動紹介

### 「 ボランティア部と ACEF さんがついにコラボ！ 」
### ～ 「つくる」側になって初めて見えたこと ～




ボランティア部では毎年高等部の文化祭で、ACEF(Asia Christian Education Fund)さんのご協力のもと、バングラデシュで作られた手工芸品やティーを販売しています。ACEF さんはバングラデシュの子供たちに教育支援や職業訓練のための支援協力を行っており、文化祭で販売させていただいているものも、その生徒や母親たち、現地 NGO で働く方々によって作られています。

今年度新たな取り組みとして、例年販売している「ベンガルティー」のスパイスとパッケージデザインを一緒に作らせていただき、「ドゥチャ」という青山学院ボランティア部と ACEF さんがコラボした商品を作ることができました。



そのコラボティー開発にあたり ACEF さんの事務所に試飲会にお伺いした際、偶然、バングラデシュ出身の方がボランティアで事務所にいらっしゃいました。そして私たちが新しいベンガルティーを考えているのだと伝えると、実際にご家庭での淹れ方を教えてくださり、とても貴重な経験をすることができました。「ドゥチャ」というのも、その時に教えていただいた、現地で「ミルクティー」を意味する言葉です。

また、家庭での飲み方や、現地では砂糖をたくさん入れるのだということ、ご家族の話などもお聞きし、どこか遠い国の印象だったバングラデシュを、すごく身近に感じることができました。そして販売の際にも、ボランティア部のブースを訪れてくださった方々にその商品一つひとつの背景、そして購入することによってどうなるのかを知っていただきたい、という気持ちになりました。

今年の文化祭の活動の中で私は、主体的に取り組むからこそ得られること・気がつけることがあると感じました。

昨年も同様に販売する手工芸品の検品のボランティアで事務所にお伺いさせていただいていたのですが、当時はまだ ACEF さんについても、ボランティアについても未熟だった私は、ただ言われた活動をこなすだけになってしまっていたように思います。

しかし、例えば私が検品を行った手工芸品一つひとつの背景にも、たくさんの方が関わっていて、そのようなことに気がつかず思いを馳せないまま行う活動は、本当に「ボランティア」と言えるのでしょうか。今年、コラボティーの開発をしよう、となっていたからこそ生まれた繋がりがあったように、ボランティアの活動だけでなく、何事にも自ら取り組むことによって見えてくる世界があると思います。

「無関心」ということが問題視される今、その世界に気づくことが、もしかしたら誰かを支えることにも繋がるのかもしれない、と考えました。

それから私は、「小さくても、私に何か新しくできることはないだろうか？」と考えるようになりました。すぐに具体的な行動を起こすことが難しくても、現状やどんな支援が行われているのかを知り考えることが重要なのではないでしょうか。

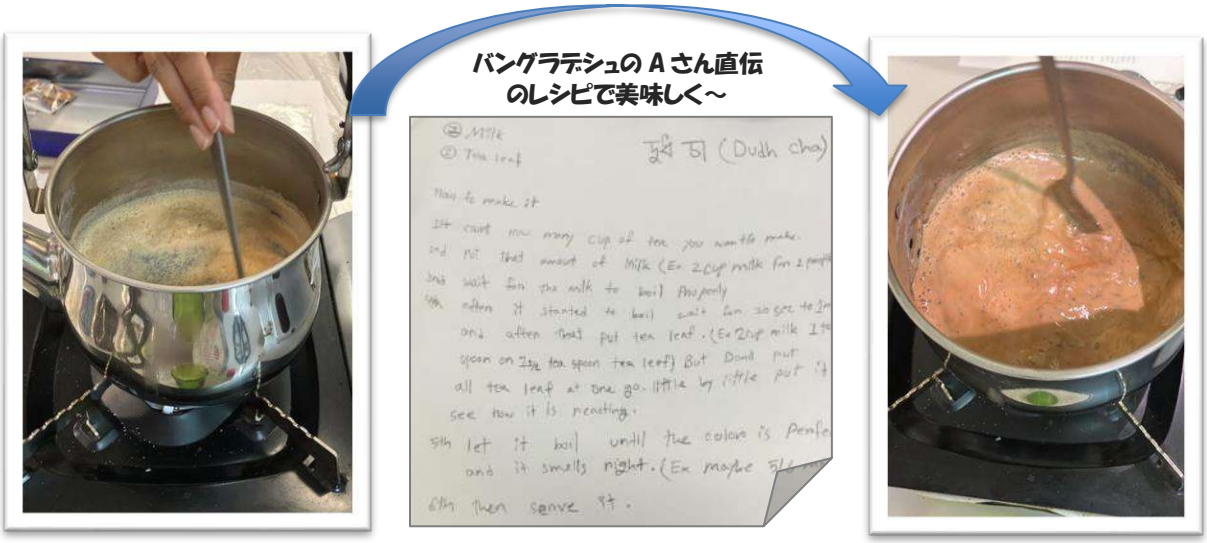
そして、ボランティア部に入部し、一人では微力でも、たくさんの方々や団体さんのお陰で直接支援に関わる機会を頂けているからこそ、高校生だから見える視点や考えで、力になりたいと思いました。

最後に、普段あまり活動内容が知られていないボランティア部ですが、文化祭での販売を通した ACEF さんとの取り組みの他にも、障がいのある方と活動する青年教室や手話の練習、ホームレスの方への炊き出しなどさまざまな活動を行っています。

青年教室に参加したことで、本当にその人のために「サポートする」ということがどういうことなのかを学べたり、手話を学ぶことでコミュニケーションについて考えられたり、活動の中では、これから「共生」を考えていく上での気づきがたくさんあります。

ボランティア部での多くの繋がりに感謝して自分には何ができるのか考え続けていきたいですし、この記事が、皆さんがボランティアについて興味を持つきっかけになれば嬉しいです。

２年　H. I.



# ◎報告：山の手空襲を語り継ぐ集い

プログラム参加者の体験記

「 歴史を語り継ぐと聞いて、皆さんなら何をしますか？ 」



７月 12 日、私たちは高等部生徒会の代表として、「山の手空襲 81 周年追悼 朗読と音楽の集い」において司会を務めさせていただきました。この集いでは、山の手空襲を経験された方のお話や戦争体験記の朗読、音楽の演奏などを通して、山の手空襲の記憶と向き合います。今回、この集いに携わったことで、私は歴史を学ぶことと、歴史を語り継ぐことの違いについて考えさせられました。

学校の授業では、戦争が起きた背景や空襲による被害など、さまざまな歴史的事実を学ぶことができます。しかし、事実を知ることと、その出来事を深く理解することは、必ずしも同じではありません。数値や記録から被害の大きさを知ることはできても、そこに生きた人々が何を感じ、どのような思いを抱えていたのかまで理解することは容易ではないからです。この集いで向き合ったのは、単なる歴史上の出来事ではありませんでした。その一つひとつの事実の向こう側には、私たちと同じように日常を送り、それぞれの人生を歩んでいた人々がいたはずです。語り継ぐとは、過去に起きた出来事を振り返るだけではなく、その場にいた人々の感情や生き方に思いを巡らせ、歴史を自分自身に引き寄せて考えることなのではないでしょうか。

戦争を実際に経験された方々の言葉を直接聞くことができる機会は、年々少なくなっています。だからこそ、これからの時代において、歴史を語り継ぐことの意味はますます大きくなっていくでしょう。しかし、当時の出来事を記録し、後世に伝えるだけで、本当に語り継いだことになるのかという点では疑問が残ります。伝えられた言葉を受け取る私たちが、その背景にある感情や一人ひとりの人生に思いを巡らせ、そこから何を考え、何を受け取るのか。その過程があってこそ、過去の記憶は単なる記録にとどまらず、今を生きる私たちにとって意味を持つものになるのではないでしょうか。

今回、司会という立場でこの集いに携わったことで、戦争の記憶を受け継ぐことは、特別な誰かだけが担うものではなく、私たち一人ひとりに関わることなのだと感じました。歴史を過去のものとして切り離すのではなく、そこに生きた人々の思いを自分自身の問題として受け止める。そして、受け取ったものを自分なりに考え、次の世代へとつないでいく。そうした積み重ねが、歴史を語り継ぐということなのではないでしょうか。





では、私たちに何ができるのでしょうか。まずは、過去に何が起きたのかを知り、そこに生きた人々の声に耳を傾けること。そして、知ったことを自分なりに考え、その意味を誰かに伝えていくこと。歴史を語り継ぐことは、必ずしも大きな行動から始まるわけではありません。一人ひとりが過去と向き合い、考え続けることにも、その第一歩があるのだと思います。

歴史を語り継ぐと聞いて、皆さんなら何をしますか。

この問いに対する答えを、私自身もこれから考え続けていきたいと思います。

3 年　K.I



✿ 2026 年 5 月 25 日（月）

## 表参道交差点の追悼碑前（献花）








第二次世界大戦で、青山学院は試練を与えられました。1945 年 5 月 25 日のアメリカ軍による山の手空襲では青山学院の 7 割の建物が焼失しました。　（青山学院 Web ページより）

《 参考資料 》　動画：10:37 分

俳優：仲代達也さん秘蔵インタビュー（「報道特集」2017 ）